

令和2年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）  
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と  
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 小澤 浩司 東北医科薬科大学医学部整形外科学 教授

研究要旨

本事業で集学的慢性痛診療チームの構築活動を行った。新型コロナ感染症の影響で、東北地区の活動としてオンラインで講演会1回、研修会2回行った。施設訪問は行えなかった。

**A. 研究目的**

新型コロナ感染症流行下における、参加者、講師の直接的な接触を避けて行う慢性疼痛に関する研修法を検討する。

**B. 研究方法**

Zoomを利用して研修会を行う。各講演内に討議時間を設け、参加者が4,5人のグループに分かれ、ファカルティが1名入り、グループ討議を行う。この際にブレイクアウト機能を使用し、その効果を検討する。

**C. 研究結果**

令和2年12月27日に行われた第1回慢性疼痛診療研修会において講師、ファカルティとして、令和3年2月7日に行われた第2回慢性疼痛診療研修会においてファカルティとして、ブレイクアウトルームの運営を行った。ブレイクアウトは良好に機能したが、以下の問題点が確認できた。

1. 通信状態が安定しないと、安定するまで待つ必要があった。
2. 討議が盛り上げるとブレイクアウトの解除までに発言が終わらず、途中で途切れることがあった。
3. 参加者の非言語的なサインがわからないため、参加者同士が親密になる感じがなかった。
4. 司会を務めたファカルティが指名し参加者が発言するため、参加者の自律的な学習姿勢が薄れる傾向があった。

**D. 考察**

研修会では単なる講演会と異なり、講師と参加者間、参加者間の双方向性のコミュニケーションが重要である。本年度は大人数が集まることを避けるために、Zoomを利用して研修会を行った。Zoomのブレイクアウト機能を用いてスモールグループで討議を行った。ブレイクアウト機能は、少人数に分かれて討議するうえで有効であった。司会進行はファカルティが務めた。参加者は指名を受けてから発言するため、PBLチュートリアルのような参加者の自律的な学習姿勢が薄れる傾向がある。

**E. 結論**

Zoomのブレイクアウト機能を用いた研修会を行い、問題点について検討した。ブレイクアウト機能は、少人数に分かれて討議するうえで有効であるが、顔を合わせないオンライン会議の制約のためのいくつかの問題点がある。

**F. 健康危険情報**

総括研究報告書にまとめて記載。

**G. 研究発表**

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

**H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）**

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録

なし  
3.その他  
なし